

二〇二四年八月二三日

他人に聞く亡夫の逸話や長き夜
秋風や荷台に覗く子牛の眼
くるくると回る子犬や群とんぼ

むべ
よし女
康子

二〇二四年八月二二日

子が覚えチャーハンつづく夏休み
蜻蛉の伴走うれしペダル漕ぐ
上段に構へ蟻螂たじろがず
通されて暫くひとり夏座敷

なつき
せいじ
澄子
うつき

二〇二四年八月二二日

鯉の池錦沈めて水澄みぬ
神職の一人は女白芙蓉
爽やかな風にカーテン膨れけり

澄子
よし女
えいじ

二〇二四年八月二〇日

水菓子に添へて一茎吾亦紅
秋天を袈裟がけに切る飛行雲
モノレール窓に満月ついてくる
ふしくれの指が繕ふ菊人形

澄子
ぼんこ
かえる
みきお

二〇二四年八月一九日

子ら去にて伽藍堂なる冷蔵庫
一両車大き弧を描く青田かな
縦横に闇夜切り裂く稲光
雑踏をおろおろ歩む残暑かな

あひる
うつき
むべ
澄子

二〇二四年八月一八日

去ぬ孫ら見送りてより昼寝かな
蒼き舌赤き舌見せかき氷
連発の余韻の煙火花果つ

あひる
むべ
うつき

西窓のゴーヤ小さきまま爆ぜる
月の出にまだ灯さずにある書齋
ジャズ流るレトロ喫茶やかき氷

なつき
幸子
山椒

二〇二四年八月一七日

葬終へて香匂ふ髪洗ひけり
校長のうしろ手に佇つ秋風裡

康子
幸子

毎日句会みのる選・二〇二四年八月二五日